

進路面接を生かした進路指導について

—三者面談を生かした進路指導—

農業科 高柳 真人

1. はじめに

本校では、平成6年度より、高等学校における、普通科・専門学科に並ぶ第3の学科である総合学科を設置した。総合学科とは「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」（文部省、1993a）であり、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」（文部省、1993b）がその教育の特色の一つとなっている。すなわち、総合学科とは進路指導を重視した学科であるということができよう。この場合の進路指導とは、従来ややもすると批判を招いてきた、単なる学校紹介や職業斡旋を行うことではなく、生徒の（職業的）自己実現をめざした生き方に関する指導につながる指導であるということができる。

このような進路指導においては、生徒一人一人の個性や進路設計に応じた指導が行われることが要請されると考えられる。従って、指導の進め方としては、個に応じた進路相談が重要な役割を果たすことになるであろう。

国分（1998）は進路相談について、「進路相談というのは、夜尿症の治療よりやさしいと思っている人がいる。つまり、学校紹介や職業斡旋くらいなら素人でもできるとしている人がいる。そんなことはない。卒業後のあてもなく惰性で通学してくる高校生が『これからどう生きるか』を考えるようになるにはどうするか、という問いは、だれにでも答えられるものではない。夜尿症を治すのもプロフェッショナル、人の成長をヘルプするのもプロフェッショナルである。『育てるカウンセリング』『教師の使えるカウンセリング』の提唱者たる私にとって、進路指導は構成的グループエンカウンターとともに目玉商品である。…学校紹介、職業斡旋以上のものが進路相談にはある。青年期にとってそれは非常に大事なものである、ということをお願い」と述べている。進路相談については文部省（1983b）も、「進路指導のハイライトは進路相談にあるのが通説である」と述べているが、国分の言うような意味において、総合学科における進路指導のハイライトも進路相談にありといえよう。

進路相談は学校教育のあらゆる場面で展開されるものであり、意図的、偶発的な場面での実施が考えられるが、効果的な進路指導を進めるとする観点から考えると、様々な進路情報の用意なども含め、進路相談の機会が計

画的に設けられていたり、適宜、実施されるような体制が作られていることが望ましいということができよう。総合学科のシステムを生かすためには、教師が「これまで以上に生徒に相談的に関わることが期待される」（高柳、1998a）という指摘もある。

こうした要請に対して、本校では、毎年、6月の前期中間考査終了後に、1年生から3年生までの全生徒を対象に三者面談が計画されている。1年次では、学校生活への適応といったテーマも取り上げられるが、それと同時に、前期集中科目として学習中の、総合学科原則履修科目「産業社会と人間」での学習と連動した「時間制作成」すなわち「科目選択」についての面談が行われる。また、2年生、3年生に対しては、主として、希望する進路先についての面談が中心になる。特に、3年生においては、具体的な進路先を決定する機会となっている。

経験論的に、進路指導が充実していれば生徒指導はいらぬということがいわれることがある。すなわち、進路指導が効果を挙げ、生徒が自らの生き方を見出し、目標に向かって努力できるような体制が作られてくると、非行対策といった消極的な生徒指導はいらなくなるということもいったものである。実証的な物言いでないにせよ、一面の真理をついていると思われる。従って、この三者面談が稔りあるものになることが、生徒の主体的、意欲的な学校生活につながるものと考えられる。

そこで、本研究においては、本校で行われている三者面談という教育相談の機会を取り上げ、三者面談が生徒にとってどのような意味を持っているのかを明らかにし、併せて、三者面談を生かした進路指導の進め方について検討を加えることとする。この目的で、平成10年度に、全校生徒を対象にした「総合学科の進路指導に関する調査」を実施した。調査用紙は、三者面談が終了した後の7月に配布され、夏季休業事前指導の日に実施された。1年生1クラスのみ、HR活動の都合で、9月1日に実施された。調査終了後、調査用紙は回収され、分析が行われた。この調査用紙には、他の調査項目も記載されているが、他の部分は、別の機会に検討することとし、本研究においては、三者面談に関する部分のみを分析することとする。尚、調査以来や調査の目的、調査項目については、図1に示した通りである。

総合学科の進路指導に関する調査

農業科・進路指導部 高柳 真人

この調査は、総合学科の特色を生かした進路指導の進め方を考えるための基礎資料を得るために行われます。結果は、統計的に処理され、個々の回答者に迷惑をかけることはありません。総合学科で学んだ経験をもとに、調査にご協力下さい。

3. 三者面談について、やってよかった点、不満足な点があったら書いて下さい

① 1年次の面談（主として時間割作成についての）

② 2年次の面談（主として進路先の希望についての）

③ 3年次の面談（主として進路先の決定についての）

1. 科目選択（自分だけの時間割を作ること）について

⑤ 時間割を決める際、必要な情報として当てはまるものの記号に丸をつけて下さい。

また、それが「産社」で得られたら「産」、 「産社」以外の授業なら「他」、三者面談で得られたら「三」、得られなかったら×を（ ）の中から選んで丸をつけて下さい。

ア. 成績や適性など、自分に関する情報（産・三・他・×）

イ. 大学・専門学校・企業等進路先に関する情報（産・三・他・×）

ウ. 希望する進路にふさわしい科目選択の仕方に関する情報（産・三・他・×）

エ. 科目の内容に関する情報（産・三・他・×）

オ. その他（ ）（産・三・他・×）

図1 三者面談に関する調査

2. 本校における三者面談を生かした進路相談

(1) 三者面談を行ってよかった点、不満足な点

「三者面談について、やってよかった点、不満足な点があったら書いて下さい」という調査項目に対し、自由記述で回答する形式の質問に対し、全学年から合計して146名の回答があった（全体の36.3%）。学年ごとに分析するには回答数が少ないと思われるので、3学年分を

まとめて分析することにする。

よかった点を挙げた生徒が97名（回答の66.4%）、不満足な点を挙げた生徒が49名（同33.6%）であった。これらの回答を、その内容から、進路検討・科目選択・自己理解・人間関係・面接運営の5つのカテゴリーに分類し、それぞれよかった点、不満足な点を整理した。

その結果を、図2に示す。

《3者面談を行ってよかった点、不満足な点》

『三者面談について、やってよかった点、不満足な点があったら書いて下さい』という問いに対し146名（36.3%）の回答があった。

よかった点を挙げた生徒が97名（回答の66.4%）、不満足な点を挙げた生徒が49名であった。回答を以下の5つのカテゴリーに分類し、主な回答を例示した。

- 〔進路検討〕64名…◇よかった55名――9名◆不満足
- ◇よかった。自分の進むべき道の鍵になった（1年）
 - ◇自分の進路を真剣に悩めるようになった（1年）
 - ◇自分のやりたい職業の間口の狭さを知らされた。第1志望は就職だが、進学も考えるきっかけとなった（2年）
 - ◇もっと自分が勉強しなきゃいけないんだと感じた（2年）
 - ◇自分の進路の可能性や自信がついた（3年）
 - ◇進路についてのアドバイスをしてもらい、視野が広がった（3年）
 - ◇進路決定に役立った（3年）
 - ◆進路についての情報不足（6名）
 - ◆自分が何をしたいか分からなくなった（2年）
- 〔科目選択〕25名…◇よかった21名――4名◆不満足
- ◇時間割のことで悩んでいて、アドバイスをもらった（1年）
 - ◇時間割を見直すことができた（1年）
 - ◇進路に合わせた時間割についてのアドバイスがあり今とても役立っている（2年）
 - ◇自分の興味・関心のある授業を取れるように助けてくれた（2年）
 - ◆時間割作成の情報が乏しい（2名）
 - ◆他の教科に変えろというのはやめてほしかった（2年）
- 〔自己理解〕14名…◇よかった12名――2名◆不満足
- ◇自分の考えの甘さや実際社会の厳しさを教えて戴いたことと、自分の考えを考え直せたこと（1年）
 - ◇自分の今の状態やこれからのことに関する話が相談できてよかった（1年）
 - ◇いい点悪い点の指摘（2年）
 - ◆やったあと落ち込む（2名、2年）
- 〔人間関係〕17名…◇よかった9名――8名◆不満足
- ◇楽しかった（1年）
 - ◇担任と話す機会がなかったのもあって、いろいろなことが話せてよかった（1年）
 - ◇自分の意見を聞いてくれたので嬉しい（3年）
 - ◇励ましてもらえたので心強くなった（3年）
 - ◆自分の希望する進路が先生が嫌そうだった（2年）
 - ◆厳しい一言に、グサッと来た（3年）
- 〔面接運営〕26名…◇よかった0名――26名◆不満足
- ◆意味がなかった・ためにならなかった（13名）
 - ◆2者面談がいい”親と一緒にいいや”（8名）
 - ◆実施時期や面談時間”長い、短い”（6名）

図2 三者面談を行ってよかった点、不満な点

①進路検討の機会として

三者面談を自分の将来の進路を考える「進路検討」の機会として捉える生徒が64名(回答の43.8%)いた。また、そのうちの86%に相当する55名の生徒は、図2に示されたように「自分の進路を悩めるようになった」とか、「自分の進路の可能性や自信がついた」、「視野が広がった」といったポジティブな評価を行っている。

一方、約1割の生徒は、担任からの情報不足を感じている。進路相談のように、生徒の心の中に将来像を形成させようとする場合、モデリングをはじめとする適切な情報提供が重要な役割を果たすと言われている。担任自体が、例えば、進路先に関する全ての情報を把握してなくても、「この情報はこの教科の先生に聞くとよい」とか、「このことは進路指導部に相談したら」といった、進路探索のためのより基本的な情報を提示することも一つの方法になると考えられる。

また、ここではネガティブな反応として分類したが、「自分が何をしたいか分からなくなった」という回答をした生徒がいるが、2年生の時点では、むしろ、真剣に自分に目を向けた結果であるともみることできる。このままその生徒を放っておくと、本人も困ることになるが、更に、相談の機会を設けたり、適切な情報提供を行うことで、進路指導の機会として生かすことも可能であると考えられる。

②科目選択の機会として

既に選択した科目を変更することも含め、科目選択を考え、行う機会は、生徒が自分の進路を考える上で重要な役割を果たすと言われている(例えば、高柳、1998b)。本校の三者面談でも、科目選択について検討する機会として捉える生徒が25名(17.1%)いた。そのうち84%に当たる21名は、「時間割のことで悩んでいてアドバイスをもらった」とか、「進路に合わせた時間割についてのアドバイスがあり、今とても役立っている」、「自分の興味・関心のある授業を取れるように助けてくれた」といったポジティブな評価を与えている。一方、情報不足であったり、教師の側から科目選択を押しつけることに対して不満を表明する生徒も存在した。

生徒が選択した科目について、進路の実現といった観点や学習の系統性の確保といった観点から、教師にとっても理解しにくい科目選択をしている生徒に対して働きかけたいと思われる。このことは、生徒の視野を広げる上でたいへん重要なことであり、大いに進めてよいことだと思われるが、注意すべき点として、頭ごなしの押しつけにならないことが重要であろう。どのような理

由や見通しを持って、その生徒はその科目を選択しているのかということを確認しながら、教師の体験や、例えば進路先に必要な知識、技術の基礎としてこの科目が必要であるといった情報提供を行いつつ対応するのがよいと思われる。生徒の考えを尊重するといつて何の働きかけもしないのも、生徒にとっては、自分の科目選択の適否を検討する機会を失するという点では好ましくないであろう。かといって、教師の思う方向に強引にもっていくのも好ましくない。生徒の考えていることをまず聞きながら、必要と思われるアドバイスなどを含め相談していく姿勢が必要であろう。

③自己理解の機会として

三者面談を自己理解の機会として捉えている生徒が14名(回答の9.6%)いた。そのうちの約83%に当たる12名が、「自分の考えの甘さや実際の社会の厳しさを教えて戴いたことと、自分の考えを考え直せたこと」であるとか、「自分の今の状態やこれからのことに関するところが相談できてよかった」といったポジティブな評価を行っている。ネガティブな反応としては、2名の生徒が、「やったあと落ち込む」と書いている。但し、この反応も、この記述からだけではわからないが、生徒のナーシズムが粉碎されたのであれば、意味がないとはいえないであろう。或いは、教師の対応による面が大きいとすれば、対応の仕方を考える必要もあろう。このように、落ち込む生徒については、その後の様子を観察するなどして、適宜、フォローしておくことも必要であろう。

④人間関係を構築する機会として

三者面談が、改めて教師との人間関係を構築したり、確認したりする機会となるという回答をした生徒が17名(11.6%)いた。「自分の意見を聞いてくれたので嬉しい」とか「励ましてくれたので心強くなった」というようなポジティブな評価と、「自分の希望する進路が先生が嫌そうだった」とか「厳しい一言に、グサッと来た」といったネガティブな評価が半々であった。

三者面接を行い受容されたり、ポジティブな評価を与えられることは、生徒にとって、その後の進路選択を検討する上で、自信となったり、進路検討行動を促進したり、教師と相談しようとする気持ちを育てることになる。一方、ネガティブなメッセージを受け取った生徒は、進路検討行動や教師との面談に消極的になることも考えられる。教師が自分の意見を生徒の参考になるように提示することは、生徒の視野を広げる意味でも、たいへん大きい意義を持つと考えられるが、提示の仕方によっては、ネガティブな受けとめ方を招くことにもなり、配慮が必

要になろう。

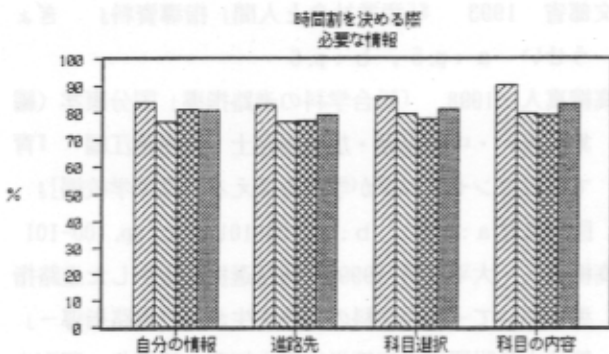
⑤面接の運営に関して

三者面談を行ったことに対しても28名(18.2%)からの回答があり、いずれも「意味がなかった、ためにならなかった」とか、実施時期や三者という方法、或いは、面談時間が不適切といったネガティブな反応であった。

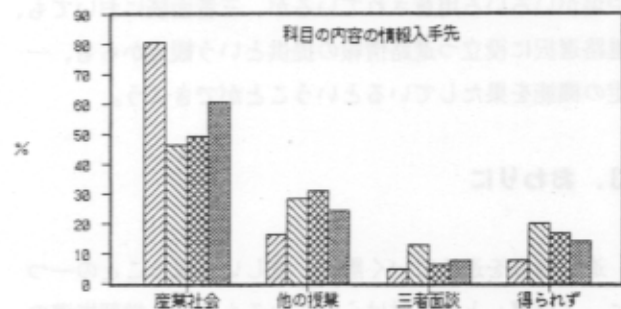
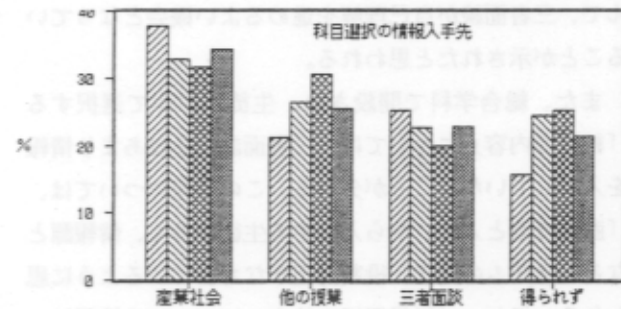
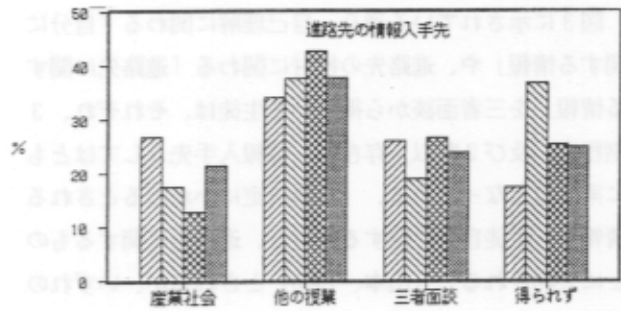
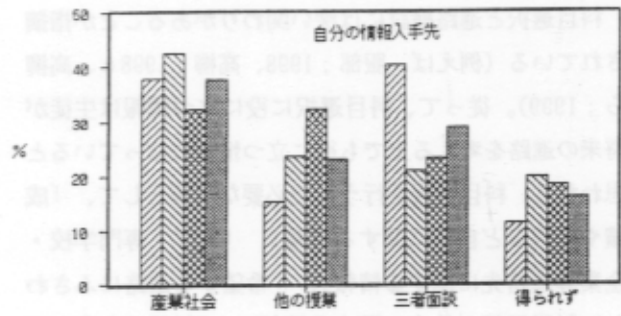
「意味がなかった、ためにならなかった」という生徒が13名(8.9%)いるが、準備をし、機会を設けて行う三者面談を意義深いものとするために、これまで挙げられた「情報不足」や「教師の押しつけ的対応」、或いはこの中で挙げられている面接の方法、時期などについて振り返ってみることは必要であろう。とはいえ、例えば、三者面談がいやであるという生徒に対しては、三者で相談することの意義を理解できるようによく説明することも必要であろう。毎年実施される重要な進路相談の機会であり、三者面談の評価とそれに基づく次年度の実施計画作成の重要性が示されているように思われる。

(2) 三者面談が進路情報提供に果たす役割

本校で実施されている三者面談の進め方については、いくつかの課題は残しつつも、概ね、指導の効果を挙げているように思われる。そのような成果が挙げられている要因としては、教師のサポート的な人間関係等をはじめとする諸要因が考えられるが、特に、三者面談での進路検討行動を促進している要因として、進路情報の提供という要因があることが考えられる。そこで、本校における三者面談の役割を更に明確にするために、生徒がどのような進路情報を入手しているのかについて、「総合学科の進路指導に関する調査」(図1)において調査を行った。調査項目と結果を図3に示す。



■ 第1学年 □ 第2学年 ▨ 第3学年 ■ 全校



■ 第1学年 □ 第2学年 ▨ 第3学年 ■ 全校

図3 三者面談が進路情報提供に果たす役割

科目選択と進路検討には深い関わりがあることが指摘されている(例えば、服部;1998、高柳;1998c、高柳ら;1999)。従って、科目選択に役に立つ情報は生徒が将来の進路を考える上で役に立つ情報になっていると思われる。科目選択を行う上で必要な情報として、「成績や適性など自分に関する情報」、「大学・専門学校・企業等進路先に関する情報」、「希望する進路にふさわしい科目選択の仕方に関する情報」、「科目の内容に関する情報」の4つが、それぞれ8割程度の高い選択率となっているが、これらの情報は、そのまま、進路先を検討する上で必要な情報ということができるであろう。

図3に示されている通り、自己理解に関わる「自分に関する情報」や、進路先の検討に関わる「進路先に関する情報」を三者面談から得ている生徒は、それぞれ、3割程度、及び2割以上存在し、情報入手先としてはともに第2位となっている。「進路決定にかかわるとされる情報は、生徒自身に関するものと、進路先に関するものとに大別される」(山本、1998)とされるが、いずれの情報についても、本校では、三者面談から得ている生徒が一定数存在することが確認された。特に、入学間もない1年生では、「自分に関する情報先」約4割の生徒が三者面談を挙げており、科目「産業社会と人間」とならんで、三者面談が自己理解を進めるよい機会となっていることが示されたと思われる。

また、総合学科で開設され、生徒がやがて選択する「科目の内容」については、三者面談からはあまり情報を入手していないことが分かる。この情報については、「産業社会と人間」から入手する生徒が多く、情報源となるシステムの間で、役割分担がなされているように思われる。但し、「科目選択の仕方」についての情報は、三者面談でも2割以上の生徒が入手しており、きめ細かな個別指導の場となっていることが考えられる。

総合学科では、生徒が将来の進路について考える機会や場がいろいろ用意されているが、三者面談においても、進路選択に役立つ進路情報の提供という観点からも、一定の機能を果たしているということができよう。

3. おわりに

進路指導を進めていく際に、難しいと思うことの一つに、「指導」とは名付けられているものの、学習指導のように、教えることがそのベースとなっていないということがある。勿論、観察、検査、面接などに基づく生徒理解の情報を提供したり、進路先についての情報を提供

することはできるが、「こう生きるのが望ましい生き方である」ということを教えることができないという点に、教えることに慣れていない身では、もどかしさを感じてしまうことがないではない。しかし、教師が生徒に教え込むという関係でなく、生徒一人一人の独自の世界に寄り添う経験は、同時に、そう簡単には得られない、たいへん魅力的な経験ともなり得る。知らない世界を探索したり、新しい世界の誕生に立ち会うような思いのすることさえあるのである。もちろん、興味本意に関わることは許されないが、こうした相談的な経験が教師としての枠組みを見直したり、広げてくれることも少なくない。

とはいえ、どのように相談を進めていくか、どのような情報を、どのようなときに提供していったらよいのか、といったことをはじめとして、進路相談には難しさがつきまとう。その難しさを思いつつ、実践を積み重ね、一人一人の生徒にかなった進路相談の進め方について、今後も検討していきたいと思っている。尚、本研究の一部は、平成10年度第40回高等学校教育研究大会で「総合学科における進路指導の進め方」と題して発表が行われた。

引用文献

- 服部次郎 1998 「主体性を培う履修計画の作成」『月刊高校教育』学事出版 12月増刊号
- 国分康孝 1998 「カウンセリングを生かした進路指導 本章のねらい」国分康孝(編集代表)・中野良顕・加勇田修士・吉田隆江編『育てるカウンセリングが学級を変える [高等学校編]』図書文化 P.65
- 文部省 1983 中学校・高等学校進路指導の手引き—高等学校編—(改訂版) 日本進路指導協会 a : p.105, b : 付録参考資料・実践例等P.37, c : p.105
- 文部省 1993 『「産業社会と人間」指導資料』ぎょうせい a : p.5, b : p.6
- 高柳真人 1998 「総合学科の進路指導」国分康孝(編集代表)・中野良顕・加勇田修士・吉田隆江編『育てるカウンセリングが学級を変える [高等学校編]』図書文化 a : P.97, b : pp.100-101, c : pp.100-101
- 高柳真人・大平典男 1999 「科目選択を生かした進路指導について—総合学科の特色を生かした進路指導—」筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第37集 印刷
- 山本博之 1998 「進路決定を援助する情報提供」国分康孝(編集代表)・中野良顕・加勇田修士・吉田隆江編『育てるカウンセリングが学級を変える [高等学校編]』図書文化 p.83